

〔續本朝往生傳〕阿闍梨延慶者、武藏守業貞之舍弟也。○中其年臘月、令弟子道圓上人問鄉音、有人答曰、狹夜深氏、何方賀月之、西倍行云々、道圓釋曰、西方往生之相也、十五日以後、月稱晨月、若十四日可遷化歟。

〔八雲御抄三上月略○中〕ありあけの月は、十五日い後をいふよし、在匡房往生傳、

〔續世繼七うたれ〕土御門の右のおと○源と申しは、はじめて源の姓えさせ給て、師房のおと○顯房ときこえさせ給き、御身のざえもたかく、文つくらせたまふかたもすぐれ給て、野のみかりのう

たの序など、人の口にはべるなり、又月のうたこそ、こゝろにまみてきこえ侍りしか、

有明の月まつほどのうた、ねは山のはのみぞ夢にみえける

〔源平盛衰記二十六〕忠盛婦人事

忠盛備前守ニテ、國ヨリ都へ上タリケルニ、院○白ヨリ御使アリテ、攝津國ヤ難波瀉、明石ノ浦ノ

月ハ、イカニカ有ト御尋有ケレバ、御返事ニ、

有明ノ月モ明石ノ浦風ニ波計コソヨルト見エシカト申タリ、御感有テ金葉集ニ被入ケリ、

〔新古今和歌集春〕文集嘉陵春夜詩、不明不暗、朧々月、といへることをよみ侍ける、

大江千里

てりもせずくもりもはてぬ春のよの朧月夜にまぐ物ぞなき

〔碩鼠漫筆〕朧夜の語例

或歌讀の先生いへらく、近人の歌を見るに、朧夜といふ語おほし、古人は常に朧月夜とつゞけて、おぼろ夜とはをさく、いはざりきといへり、春村按ふに、こはよろしげなる心づきなれど、

古今六帖第五帖に墨染のたそがれ時のおぼろ夜にありてし君にさやにあひみつとまづは見ゆれば、ふつになしとはいひがたかるべし、但し李花集の詞がきに、朧夜の月のひかりによ

朧月